

気象要素	種類	注意報	警報
雨	量	70 mm	120 mm
風	速	12 m	17 m

害が10件発生した場合と2.の結果とも考え合せ、風速、雨量に対応させて各種災害を記入すると Fig. 19, 20に示すようになる。この表で災害が集中発生する点を注意報、警報の発表基準とすると表のようになる。

岐阜県下ではこの基準で注意報、警報を発表すればおむねよいと考えられ、災害の種別も対応する風速、雨

量によって検討することも出来る。一般には道路および山くずれは床下浸水よりも基準が高いと云われているが、岐阜県下は山が多く谷間を道路が走っており小雨量でもこの種の災害が多く発生しており床下浸水よりもこの災害の方が基準が低くなっている。

しかし社会の発達、構造変化により、この基準も当然変わってくるのでこのような基準の調査は数年ごとに行なう必要がある。

文 献

- 1) 大後美保著 農業気象通論。

九州支部だより

1. 昭和41年度九州支部講演会開催

本年度の九州支部講演会は、福岡管区気象研究会と共催で、10月13日9時から福岡市で開かれた。発表者は本年夏期に実施された福岡、佐賀、鹿児島の各地の地区研究会から特に選ばれたものが主体で、それに九州大学、山口大学からも参加があって、内容の充実した講演会となった。また聴講者も100名をこえ、気象台職員のほかに大学、自衛隊、海上保安部等の関係官が目立った。当日の講演題目および氏名はつぎのとおりである。

微気圧振動と異常海面振動（鹿児島）田畑七郎。

鹿児島における二重圏界面の考察（鹿児島）坂井泉。

梅雨期に中国南部で発生する雷雨域について（鹿児島）草宮一郎。

九州における大雨予想の問題点（福岡）鍋島泰夫。

佐賀県の干ばつについて（佐賀）長田英二。

日本の寒さの長期変動の研究（下関）赤井清康。

熊本県における大気汚染について（熊本）久塚清隆・伝勉

板付飛行場における悪天候の予想（福航）山田三朗。

長崎における強風時の気象について（長崎）田原寿一。

南北両半球の相互作用と長期予報の利用（長崎）植木九州男。

レーダーでみた梅雨（九州大学）坂上務。

名瀬レーダーで観測した線状エコーについて（名瀬）中宮茂斉。

台風到来の永年変化について（九州大学）真鍋大覚。

山口盆地の地形風について（山口大学）城満義。

極座標を用いた定常まさつ層内における大気の運動方程式の解（福岡）富高四郎。

冬季における東支那海および朝鮮海峡の波浪とその予想（福岡）尾崎康一。

（特別講演）

ソーラー・フレヤーと降水量との関係（気研）高橋浩一郎。

冬季日本海上における大気中の水および熱の収支（気研）高橋浩一郎。

2. 橋本会員訪中報告講演会の開催

日本学術訪中代表団の気象部門代表として、9月上旬から1ヵ月間、中国各地の学術機関を訪問されて帰朝された橋本清美会員の報告講演会を、12月2日福岡管区気象台情報室で開催した。聴講者は気象台、大学、気象協会の関係者約70名に達し盛会であった。